

今回の研修で、私の印象に強く残ったのは企業大学訪問の時間に順天堂大学天野篤教授と実際に会ってお話を聞くことができたことです。天野教授は心臓血管外科、虚血性心疾患、弁膜症に関する研究を専門とし、2012年には今上天皇の狭心症冠動脈バイパス手術を執刀した外科の名医です。天野教授は本当に忙しい生活をしていらっしゃるようで、東大研修の期間で会えることはできず、後日仙台の厚生病院にて30分ほど、それも手術終了直後と次の仕事の間のわずかな時間にお話をいただきました。まず、その多忙さに驚き、わずかな休憩時間にもなりうる時間を私たちに割いてくださった優しさに感動しました。かなり疲れる生活なのだと思うのですが、天野教授からはそんな雰囲気が全く感じられなかったのも、尊敬すべき点だなあと思いました。

天野教授からお話を聞く前に、厚生病院内を見学する時間をいただきました。当直の医師の方が入院している患者さんが食べているご飯が多すぎたり、しょっぱすぎたりしないか調べる検査を行うテーブルや、医師同士で今後の治療方針などを相談し合う仕切りのあるスペースなど、病院の仕組みの説明をいただいたり、大きな病院ならではの設備を見学したりしました。それらの中でも最も興味深かったのが病理専門医の方が仕事をしている部屋です。そこでは病理医の方に貴重な体験をさせていただきました。衝撃的だったのは、ジップロック越しに人から切り離された腫瘍やがんを触ったり、肺や胃をゴム手袋越しに触ったりしたことです。触るところか、目の前で体の内部に有る物を見たのは初めてで、正直怖いなと思ってしまいました。特に印象的だったのは子宮にできる腫瘍です。その腫瘍は生まれたての赤ちゃんより少し大きく、少し重くホルマリンにつけてあるのもあってくすんだ色をしていました。腫瘍内にも何か粘液のようなものが入っていてこれが誰かのお腹の中にあっただなんて信じられませんでした。取り出すときにどのくらいお腹を開いたのだろう…と少し疑問に思いました。また、がんもとても硬くて驚きました。病理専門医の方が「がんは今では『癌』と書くけど、昔はやまいだれに岩と書いてがん書いたのですよ」とおっしゃっていて、なるほど、と納得しました。私は病理専門医という職業を知らなかったのですが、病理専門医の方はとても楽しそうに興味深そうに仕事をしていました。調べてみたら『病理医とは、大病院などに勤務して「病理診断」を仕事とする医師のことです。

病理診断とは、患者の臓器を直接肉眼で確認したり、採取した細胞を顕微鏡などで調べたり、CTの画像を分析したりします。病理医が病気の原因を明らかにし、適切な治療方法を判断するのです。この病理診断は、手術前だけでなく術中にも行われます。きちんと病原が取り除かれているかを確認しながら、手術が進められるのです。

病理医は臨床医のように直接患者の手術を行うことはなく、病理診断の結果を踏まえて担当医に適切な助言をすることが、主な仕事内容です。いくら優秀な外科医がいたとしても、病気の診断そのものが間違っている場合は、患者の命を助けることは出来ません。それ故に、病理医は患者に直接治療しないとはいえ、絶対に診断ミスすることは許されない、大きな責任を負った仕事であると言えます。』(医者になる方法

[http://homepage3.nifty.com/bom-money/2\\_isya/sigoto/byourii.html](http://homepage3.nifty.com/bom-money/2_isya/sigoto/byourii.html) より引用)

とのことでした。患者さんと直接触れ合うことはなくても、確実に患者さんや外科の医師を助け

る仕事のやりがいを感じることができたと思える時間でした。チーム医療の連携を垣間見た時間だったとも言えると思います。

そのあと、午前からずっと手術をしていた天野教授の手術が終わりそうだ、と聞き 15, 16 班のメンバー全員で手術室の隣にある椅子やお菓子が置いてある休憩室のようなところに行きました。入ると、テレビに今やっている手術の映像がリアルタイムで流れていて心拍数のメーターも置いてあり、一見普通の部屋に見えてもやはり病院なのだな、と感じました。入ってテレビの手術の様子を見て立っていたら 3 分くらいで天野教授が手術室から帰ってきて休憩室に入ってきました。私の見ていた手術映像は天野教授とバトンタッチした若手の医師の皮膚を閉じていく様子だったようです。天野教授がいらっしゃったので会議室に戻ろうとしたら「時間無いからここでいいよ。」と、天野教授が椅子に腰かけて、私たちにも座るように言いました。確かに会議室に行かなくてもお話は聞けるので、時間の有効活用が身につけているのだなあ、と感じました。天野教授は主に私たちがメールで送っていた質問に答えてくださいました。基本的におっしゃっていたのは「勉強をしろ」ということです。高校生の私たちはどれだけ医師に夢見ても、勉強をして医学部に入らないことには医師に貼る準備すらできないので、おっしゃるとおりだなあと思っています。また、実際に大学を見て自分の志望校を決めるべきだともおっしゃっていました。天野教授自身の高校時代の教区運を踏まえて教えてくださいました。偏差値ばかり見てはいけなようです。私が質問した中では「天皇陛下の手術はほかの手術の時よりも緊張しましたか。」という質問の答えが印象強かったです。天野教授はそのときもいつもの手術と変わりなく、特に緊張することもなく臨んでいたそうです。私が質問した時も「天皇陛下の手術って緊張しそう？」と、少し不思議そうでした。どんな時も変わらずに最高の手術をするのがプロなのかもしれませんが、やはりすごいなあ…と感心してしまいました。もし私が天野教授の立場であったら、緊張してそもそも引き受けることができないのではないかと、思います。天野教授は、人を助けることには変わらないからいつもと同じでいれるそうです。そのぐらいの人を助ける集中力の強さが名医である所以なのかと感じました。

天野教授は一通り私たちの質問に答えるとすぐに次の仕事へ飛んでいきました。忙しくても一つ一つ丁寧に真っすぐ接している天野教授は人間的にも尊敬すべき人だと思います。この貴重な体験を記録して残し、のちの自分に役立てていけたらいいなと思います。厚生病院の方、天野教授、本当にありがとうございました。